ぼくがつよくなる

猿楽小学校　一年一組　馬場　大志

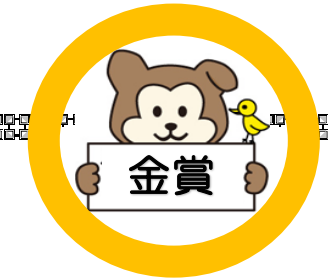
ぼくは、どうぶつが大すきです。なので、どうぶつとしゃべることができるエルマーがうらやましいです。

もしぼくもどうぶつとしゃべることができたら、２つやりたいことがあります。１つめは、うちのペットのルビーのきもちをきいてみたいです。いまなにをしたいのか、わかってあげられるからです。もっとあそんだり、すきなおかしもきけます。２つめは、エルマーがドラゴンをたすけてなかまになれたみたいにぼくもきょうぼうなどうぶつをたすけて、なかまになりたいです。どろぼうがきたとき、かぞくをまもってもらいたいからです。

でもぼくはどうぶつが大すきでも、エルマーみたいにひとりでしらないジャングルやうみにぼうけんにはいけません。たべられてしまうのもこわいし、パパのリュックにつめてもおもたくてもてないとおもったからです。

だから、ちいさいときからがんばっているからてとかをもっとれんしゅうして、きょうぼうなどうぶつよりつよくなって、ぼく

がみんなをまもれるようになりたいです。



「ちいさいおうち」を読んで

長谷戸小学校　二年一組　谷藤　緑

ちいさいおうちは、さいしょ、きれいないなかにたてられたけど、そこはだんだん町にかわっていきます。

いなかと町だったら、ぼくは町のほうがすきです。いなかは虫がいっぱいいるしくらいけど、町はあかるいからです。ぼくのすんでいるしぶ谷くえびすは、町で*/

おか山のじいじのおうちはいなかで、まっくらでなにもなくてすごくこわかったです。ファミマのでんきを見つけてほっとしました。いなかはぜんぶ、どんどん町になったほうがいいと思っていました。

だから、さいしょ「ちいさいおうち」をよんだとき、ビルがたくさんできて、よるもあかるくなった町を、ぼくはきれいになってよかったなと思いました。

でも、ちいさいおうちは、こまっていました。いなかがだんだん町になってきて、だんだん元気がなくなっていきます。

ぼくは町がすきだから、なんでこまっているのかなとふしぎ

に思いました。星が見えなくなったり、空気がほこりだらけになったと書いてありました。

アマゾンの森の火じのニュースを見たら、木や森があるおかげできれいな空気ができることがわかりました。やっぱり町はもうつくらないほうがいいかなと思いました。

でも、ぼくのえびすは、ちいさいおうちの町ほど、いやなところではありません。えびすガーデンプレイスの39かいから、えびすや目ぐろの町を見て、なにがちがうのか、考えてみました。

ちいさいおうちの町には、木が一本もなかったけど、とうきょうには、ところどころ木があります。町をつくるときは、森ものこして町にしたら、ちいさいおうちもくらしやすかったんじゃないかと思いました。

ちいさいおうちは、さいご、ちがういなかにひっこして、元気になりました。ちいさいおうちには、いなかのほうがにあっています。いなかがのこっていてよかったね。

お金って何だろう

神宮前小学校　三年一組　田中　ひらり

お金って何だろう。私のお母さんはお金の先生をしているので、質問すると答えてくれるが、何とか自分でも少し分かるようになりたいと思っていた。そんなとき、しぶやおすすめの本50で「レモンをお金にかえる法」を見つけたので、さっそく読んでみた。

この本は主人公の女の子ミーがレモンをレモネードにして売るというおはなし。私はレモネードが大好きでよく買いにいくので、お店がどうやってできるのかとてもわくわくした。

この話の中には三つのお金が出てくる。一つ目はミーが自分で売ったときのお金、二つ目はジョニーをやとって売ったときのお金。三つ目はジョニーが競争相手になって売ったときのお金。私はそれぞれのお金について考えてみた。

ミーが売るときには、おこづかいからお金を出したり、だれかにお金をかりることがあることが分かった。

二つ目はジョニーをやとって売るときは、ミーが自分でレモンをしぼらなくてよくなるかわりに、ジョニーに賃金というお金をはらうことが分かった。お金をめぐってけんかになることもあるようだ。

一番心に残ったのは、三つ目のけんか別れしたジョニーと値下げ競争をしたこと。まず、レモネードの作り方を知ったジョニー

がそのレシピを使ってお店をだしたことにびっくりした。そして、レモネードの値段を下げて売店を開いたことで、ミーも値下げしなくてはいけなくなってしまう。そのため、レモネードが売れても利益はへってしまうことが分かった。

私はものを買うとき、値下げはうれしいと思っていたが、それはかんちがいかもしれない。いっしょうけんめい、売っている人の利益が少なくなってしまうことも考えなくてはと思った。

この本のいいところはお金にかんする言葉が分かりやすく書いてあるところだ。また、お金を払う人、もらう人の立場が違うと、さまざまな問題がおこることにきづかせてくれたことだ。これからたくさんお金のことで分からないことがあるかもしれないが、レモネードのお話を思い出しながら少しずつお金のことを分かっていこうと思う。

さいごに思ったことは、ミーはいろんなかべをのりこえてジョニーといっしょにお店をやり、ついにうまくいったところだ。そのお金でバカンスに行くこともできて、お金をもらってからの楽しむ法もおしえてもらうこともできた。

わたしもしょう来、何か売る人になったらミーみたいにいろんなことをなしとげて、そのお金でバカンスに行きたいと思った。

おにたが教えてくれたこと

神宮前小学校　四年一組　目黒　龍一郎

「ふくはーうち。おにもーうち。」

僕のお父さんは、節分の時にいつもこう言って豆まきをしています。僕は、毎年どうしておにもうちに入れてしまうのかなと、変に感じていました。夏休みに、『おにたのぼうし』を読んで、「おにもーうち。」の意味がやっと分かりました。

『おにたのぼうし』は、優しくて恥ずかしがり屋の黒おにの子供であるおにたが「ひとっておかしいな。おにはわるいってきめているんだから。」と思いながらも、貧しい家の女の子のために、食べ物をあげたり、願いを叶えてあげたりして、女の子に希望や幸せを届ける物語です。僕が、おにたの行動から教えてもらったことは、大きく分けて二つあります。

一つ目は、人のために何かをしてあげたいと思うことの大切さです。おにたは、夢中で人助けをする性格です。そして、そのお返しに何かを欲しいという気持ちや、ほめてもらおうという思いを持たずに、人のためになる行いをしています。僕は、人を喜ばせたいと思うけれど、「有難う。」と言われたいし、ごほうびをもらえたら最高に嬉しいです。今までは、人のために何かをした時、それに気づいてもらえないと、暗い気持ちになることもありました。しかし、これからは見返りを求めないおにたのような優しい気持ちで、人助けが出来る人になりたいと思いました。

二つ目は、決めつけることはおかしいということです。おにたは、「おににも、いろいろあるのにな。にんげんも、いろいろいるみたいに。」と言っています。物語では、人間がおには悪いと決めつけてしまったため、おにたは悲しそうにいなくなってしまいます。僕も、苦手と決めつけて食べなかった物を後で食べたら意外と美味しくて損した気分になったことや、運動は不得意だと思い込み新しい運動の習い事を勧められても挑戦しなかった経験がありました。おにたの気持ちを読み、僕は思い込んだり決めつけたりして、視野が狭くなってしまい、楽しいことや幸せなことが見えなくなっていたことに気が付きました。今後は、何事も最初から決めつけずに挑戦してみること、人に対しては皆に同じように接することが大切だと思ったので、それらを実現できるように努力していきたいです。

「ふくはーうち。おにもーうち。」

それは、おにたが教えてくれた、決めつけずに平等に接することと、つながっていたのでした。次の節分では、僕も「ふくはーうち。おにもーうち。」と言いながら、豆をまかずに食べたいと思います。優しいおにたが、僕の家の物置きに住んでくれますように。

これからの一歩

幡代小学校　五年一組　倉持　智基

『二分間の冒険』という本を読んだ。自分について考えさせられる話だった。

機転が利く本当は頭がいいなどと、友人や先生から評価されることもあった悟だが、勉強ではいつも居残り組だった。竜退治のような少年ぽい物語や映画が好きで、友達に相手にされないこともあった。ある日、映画鑑賞会のための設営を皆としている時に、さぼってその場を離れた悟は、校庭で見かけた一匹の黒ネコを助けて、そのお礼として願いを一つかなえてもらえることになった。そこで、悟が「時間」を望むと、ふしぎな世界にいた。「一番たしかなものをつかまえたら戻れる」という条件で始まった冒険の世界だ。クイズに答えられなかったら、その者の寿命を食べてしまう恐ろしい竜とも戦った悟たちは世界で一番たしかなものが自分自身だと気づいた。

終わりまで読んでぼくは話の中で悟たちが出した「一番たしかなものは自分自身だ」という答えについて考えてみた。小さいうちはあまり意識せずに「たしかなものは自分自身だ」と生きていた気がする。たとえば習い事に行きたくないとき、その気持ちを伝えるだけで行かずにすんだ。自分の主張が通ったのだ。また低学年のうちは、自分の考えていることに自信がなくても、手を挙

げていたし、大きな声を出したり、立ち上がるなどしたりしてまで、先生に指してもらおうと必死だった。これらは「たしかなものは自分自身」ということの表れだったのかもしれない。

そのころと比べて、今のぼくは、「一番たしかなものは自分自身」ということに自信がもてなくなってきている。物語の中で、悟が好きな竜退治の話が友達からは「ためにならない」と思われていたように、自分の考えと他者からの評価に違いがあるとき、ぼくは自信がなくなる。小さいころと違って、最近ぼくは手を挙げなくなった。間違えたら恥ずかしいという周りの人への意識が、自分に対する自信よりも強くなっているみたいだ。たのまれて家のそうじをしたときに自分では一生けん命きれいにしたつもりだったが、母からほめられてもらえなかったこともある。母はまだ不十分だと感じていたのだ。そこで母が考える「きれい」の基準を教わりながら一緒にそうじの続きをしてみた。そうして、評価には違いがあることが分かった。

ぼくたちはみんな同じ基準で生きた方がいいのだろうか。ぼくは、みんな違っていいと思う。みんな同じだともめごとも起きないかもしれない。しかし、いろんな意見や好み、基準があることでおもしろさも生まれると思うからだ。

来年ぼくは、六年生なので、一番たしかなものは自分自身ということをもう一度考え直し、今後の自分のあり方を作っていきたい。

あのさくの向こう側

幡代小学校　六年三組　荒川　脩子

「しゅうこって男なの？女なの？」

私は、この言葉を聞くと、胸がしめつけられる。私は、かみが短くて、男の格好をする方が好きだ。だから、私をよく知らない人は男か女か分からないらしい。

この本は、黒人のクローバーと白人のアニーが人種のかべを越えて、心を通わせる話だ。私は、この本を読んで、この二人の、生まれもった違いを越えて、一緒に遊んでお互いを理解しようとする気持ちは、今の私自身につながるな、と思った。

私は、休み時間に、男子とドッジボールをすることが好きだ。でも、同時に、女子とおしゃべりをすることも大好きだ。低学年の頃は、男子も女子もおかまいなしに遊んでいたが、高学年になると、休み時間は、男子と女子、別々に遊ぶことがふつうになった。私はどっちにもいきたい。両方からさそわれると両方いきたい。男子と遊びたい日と、女子と遊びたい日がある。そんな時に、

「しゅうこってなんで、女子なのに、男子と遊んでるの？」

と言われ、すごく傷付いた時がある。それ以来、女子は、なぜ男子と遊んではいけないんだろうと考えるようになった。例えば、塾の試験会場は、男子と女子の部屋が違う。そこで、

試験官に、男子と勘違いされたり、女子の部屋や女子トイレに入ると、他の人から、男子なのではないかと、じろじろ見られ、はずかしい思いをしたことがある。私は、「男なの？女なの？」と聞かれたら、迷わず、「女」だと答える。ただ、その質問は本当に意味があるのかと、疑問に思う。

人種の違いや、男女の違いはなぜ、起こるのか。私は、皆同じ人間というだけでそこに違いはないのではないかと思う。黒人のクローバーは、親に、「さくの向こう側は、危険だから行ってはだめだ」と言われていたが、本当は、危険なのではなく、人種の違うアニーがいたからだ。クローバーとアニーは、自分達の意志で、さくにこしかけた。でも、友達たちは、最初は、クローバーとアニーを変な目で見ていたが二人が仲良くなったことをきっかけに、友達たちも一緒に遊ぶようになった。

私は、この本を読んで、クローバーとアニーとその友達たちが皆で、さくを越えて、仲良くなったのと同じように、みんなが仲良くできたらいいなと思った。「男だから」「女だから」ということにとらわれず、みんなで仲良くできることが、一番楽しいのではないかと思っている。